

技術の使い方、使われ方

筆者は毎年イグノーベル賞（Ig Nobel Prize）を楽しみにしている。これは「人々を笑わせ、そして考えさせてくれる研究」をした人に贈られる賞であり、ノーベル賞のパロディ版という位置付けである。昨年の受賞リストの中では「モスキート」(蚊)という発明が筆者の目を引いた。

この「モスキート」、英国の企業が超音波ティーンエイジャー撃退兵器として2005年末に商品化した小型のスピーカーであり、その名のとおり、蚊の羽音のような17kHzの高周波音を発する¹⁾。なんでも日本と同様、英国においてもコンビニの外などで若者が長時間たむろしているという状況があるらしく、そうした若者に頭を痛めている店主などのために開発されたということらしい。

人間の耳に聞こえる音はだいたい20Hz～20kHzであるが、高周波の音は年齢と共に聞き取りにくくなると言われている。モスキートが発する17kHzの音は、大人には聞こえないが十代の若者には不快な音として聞こえ、その場から立ち去らせる効果があるとのことで、早い話がよく通販などで売っている超音波ねずみ駆除器の対人間(若者)版である。

発想が害虫駆除と同じであるので、少々眉をひそめなくなる発明ではあるが、話はそれで終わらなかった。駆除の対象とされてしまった欧米の若者の間で、モスキートと同様の高周波音を携帯電話の着信音とすることが流行したのだ。上述のと

おりモスキート着信音は若者にしか聞こえないため、授業中に使われても先生は気付くことができない。今度は大人側が困ってしまった。

この技術を逆手に取った様子がおかしいということで、大きな皮肉も込めて、モスキートを商品化した英国の企業の社長にイグノーベル「平和」賞が贈られた。技術というものの使い方、使われ方について考えさせられるという点で、まさに受賞にふさわしい発明であると言えるだろう。

このような例は金融の世界、特に取引市場においても多く見かけられる。インデックスファンドという発明に対して、そのリバランスを狙った所謂コバンザメ投資²⁾が出現したり、アルゴリズム取引という新しい技術に対して、その動きを先読みして罫を仕掛けようとしたりと、枚挙に暇がない。ただ残念なことに、これらの例は笑い飛ばして済むという話ではないが。

ちなみに筆者は三十路直前であるが、このモスキート音を聞き取ることができた。聴覚的には「若者」に分類されるということで、何も聞こえないと言う同年代の同僚を横目に、ちょっぴりうれしさがこみ上げてきた。(加藤大輝)

¹⁾ 実際の蚊の羽音は500Hz前後である。

²⁾ インデックスの銘柄入れ替えなどの際にパッシブファンドが機械的に売買することを逆手にとり、組入れ予定銘柄を予め購入して、高値で売り抜ける投資手法であるが、現在ではあまり有効ではなくなっている。